

北

泉

優

子

忍ぶ糸

伊賀の女の物語

検印省略

定価 五八〇円

昭和四十六年一月二十五日 第一版発行
昭和四十六年二月十日 第三版発行

著者 北泉優子

発行者 竹内静江

発行所 三笠書房

東京都新宿区戸山町三五
電話 東京(二〇三)七七八一
Ⓜ 162 振替 東京二二〇九六

信濃印刷／端野製本

© Masako Kitaizumi Printed in Japan 1971 [0093-001026-8936]

乱丁、落丁のものは本社またはお買求めの書店にてお取替えいたします。

北泉優子

忍ぶ糸

伊賀の女の物語

三笠書房

忍ぶ糸

伊賀の女の物語

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

装
幀

橋
本

潔

序章

昭和十八年の秋、千賀は伊賀上野の組紐屋藤波へ嫁ぎ、その家の跡取り息子良作の妻となった。

昭和十八年といえ、二年前の十二月、日本軍の真珠湾攻撃によって勃発した太平洋戦争も、緒戦のめざましい戦果に反して憂色濃く、四月の山本五十六連合艦隊司令長官の戦死、五月のアツ島全員玉碎と、敗戦への道を少しずつ歩みはじめた年である。

千賀と良作の婚礼は、藤波の家で挙げられることになっていた。

その日、忍町の貧乏たれの娘が玉の輿にのって紐屋の女主人になると聞いて、物見高い町の衆が隣り近所誘い合ってやってきた。そんな人々で、千賀の住む露地裏の棟割長屋と表通りをつなぐ細長い露地は埋まった。露地に入らなかった者は、表通りの軒々に立ち、花嫁の出現を

今や遅しと待っている。昨夜激しい音をたてて降った雨も、一夜明けるとからりと嘘のように上がって、澄んだ秋空が、目に痛いような快晴であった。

人々はその姿を待つ間、千賀にまつわる無責任な噂話を交わしている。その際立つ美貌と紐づくりの腕を武器に、乗気でない良作を誘惑したのだと悪口をいう者もいたし、単純に果報者だと羨む者もいた。したり顔で、結納の額が伊賀の相場の十倍だと、知るはずのない数字を教える者さえある。ともかく、忍町の裏長屋に住む傘張り職人の娘と、西大手町の伊賀上野では二流の格を持つ紐屋の息子との結婚に至る経緯は、四方を山脈に囲まれたすり鉢の底で暮らす人々の間で、これから先も口から口へ語り伝えられていくであろうと囁かれた。

「ほれ、出て来ましたでえ」

「ほう、きれいだな。白無垢の打掛けだっせ」

「見てみなはれ、誇らしげな顔してるわ」

見物衆は感嘆の声をあげて、花嫁姿の千賀がゆっくりと自分達の前を通過していくのに見惚れた。

千賀は、銀糸で羽ばたく鶴を織り込んだ振袖に、これも純白で裾に鳳凰の舞う打掛けを重ねている。着物の知識のない者でさえ、一目で並々ならぬ高級品と判る花嫁衣裳だった。

一足二足と進むたびに、文金高島田がゆらゆらと揺れ、鳳凰が舞い上がった。

さながら女面の小面こおもてを思わせる顔をしている。その表情にいささかの翳りもなく、千賀は秘やかに笑みさえしているようでもあった。しかし彼女がこの結婚を芯から喜んでいないことは、娘につき添う母親の態度で察しられた。母親は長屋の入口を出て、露地を通り、表通りの他家の軒に横づけされている黒塗りのハイヤーに乗り込むまで、ふりあおぐのが怖ろしいかのように、終始うなだれていた。それは角かくしの下の眉をあげて歩む娘とまったく対照をなした。見物の女衆の中には、母親の固く握りしめた荒れた手が、小きざみにふるえているのを目ざとく見つけた者もいる。

千賀たちが二台の車に分乗する前に、一つの小さな出来事が起こった。結局は大事には至らず、花嫁の一行は無事忍町を後に、目指す家へと向かっていったのだったが、一時は関係者も見物衆も、はっと息をつめ成り行きをみまもったことであった。

それは、媒酌人である増住大二郎の妻静子の介添で、千賀が車の駐車している道路の向う側へ渡ろうとした時に起こった。突然、人垣の中から一人の青年が足早に現われ、千賀の前に立ちふさがったのだ。青年は京都帝国大学の制服を着て、茶色の皮のボストンバッグを下げていた。ぎくっと立ちすくむ千賀の、襟を取っていた手が離れ、ぱらりと裾が路上に拡がりおちた。

二人は目ばかりきひとつせず、じっと相手の眼を見つめている。緊張の時間が流れた。後で思い返せば、ほんの三十秒ほどだったであろうが、その瞬間は、まるで森羅万象が化石に変化したような、無気味で長い時間に感じられた。千賀の面は、ほうと上^{おも}氣していた。

「千賀……」

青年の声は低かった。その声を合図にして、深々と頭をたれた千賀が、再びきつと面を上げると、動揺の色も見せず歩み出した。青年の手がのびて引きずったままの打掛けの袂を握んだが、氷りついた表情のまま、千賀はそれを激しく振り払った。その時である。増住静子がつかつかと青年の前に進んだかと思うと、ぱしと彼の顔をぶった。反射的に頬に手を当てた青年は、静子の瞳に光る涙を見て、はじかれたように踵を返してその場を去っていった。息をのんだ見物衆の間から、ほうという安堵とも感嘆ともつかぬ声もれた。そのざわめきの消えぬ前に、花嫁姿の千賀は車に乗り込み、彼女を乗せた車は静かに、昔伊賀者と呼ばれる忍者が住んでいたという町、忍町から姿を消していった。

第一章

伊賀上野は緑の里である。三重県の西部に位置する伊賀盆地の、中心をなす伊賀上野は、真冬を除いて、年中緑におおわれている。この町を俯瞰する機会を持った者はきっと、緑の中に町があるというだろう。

伊賀上野は猫の額ほどの町だ。今でこそ旧町内の人が在所と呼ぶ近郊農村を合併して、人口約六万の小都市といわれているが、もとは藤堂藩五万石の城下町で、市街地である旧町内は、人口も三万そこそこ、隅から隅まで歩きまわっても半日とかからない広さである。狭い上に海もなく、どの町角に立っても山脈^{なみ}だけが見える、いうならすり鉢の底みたいな閉ざされた町だから、伊賀の人の心も保守的で閉鎖的である。そんな伊賀氣質を表わす言葉に、少々落ちる話だが、伊賀の連れじ、ふんべというのがある。伊賀の人は、便所でさえ連れ立っていくというの

だ。一体にこの地の人々は、目立つことを好まない。好まないというより怖れるのだ。狭いから噂の種になってしまい、その噂は口から口へ、語られ伝えられていく。伝えられるだけならいいのだが、噂の常として、雪だるま式に脚色潤色されるから、いつか真実とは似ても似つかないところでもない虚構になっているし、虚構のまま今度は親から子へ、子から孫へと語られていくのではなかったものではない。何事も他人と同じにしていればいい、そのほうが下手に動いて噂話を振り撒かれるよりは数等無難だ。それが伊賀の人々を保守的にしている一因とでも言えようか。

しかしながら、こんな伊賀国根性ともいえる性向は、あくまでも一般的な見方で、例外も勿論ある。かつての伊賀傘にとつてかわつて、郷土の特産物となった組紐を、この地に持ち帰った人、広沢徳三郎氏もそんな例外の一人であろう。

組紐くみひもとは、正絹糸で織り上げられた帯や羽織紐などのことである。明治のはじめ、彼によって江戸から移し植えられたこの組紐は、伊賀に新しい産業をと願った広沢の意志を立派に受け継いで、今では伊賀上野の誇る特産物となっている。市内には大小数十軒の組紐製造業者、つまり通称紐屋があり、三千人に近い人々がそこで働いている。そのほとんどは言うまでもなく女たちだ。

昔、伊賀上野の女たちは、女学校へ通学できる良家の娘は別にして、たいていは小学校を卒業すると同時に紐屋へかよった。最初は織り子見習いで、先輩の織り手や紐屋の主人から綾書（組紐の織り方を書いたデザインがき）の見方、糸の扱い方などを教えられ、やがて丸台や角台、そして一番技術を必要とする高台と順を追って進み、一人前の織り子になるのだった。一人前になると紐屋から台を貸与されて、子飼いの織り子になるのが普通である。紐屋へは出勤せず、自宅で織ることができる。紐の工賃は一本いくらだから、腕次第で収入も増える。技術の上だった娘は、工賃を貯め高台を購入した。自分の紐織り台を所有した織り子の利点は、仕事を選べることである。腕があるから高台織りの高級品だけを織れば、労働時間のわりには金になるわけだ。彼女たちが織った紐を手組と呼ぶのだが、手組の良し悪しは、織り手の腕一つで決まるから、紐屋は技術のすぐれた織り子を確保しようとやっきになる。当然引き抜きがありそれにつれて織り賃も昇額するし、犬畜生呼ばわりの噂さえ辛抱できるなら、フリーの織り手として、紐屋も仕事も自由に選択することさえ可能なのだ。

伊賀上野の姑たちは、よくこんなことを言ったものだ。

「うちの嫁は、紐もよう織らんど、甲斐性なしだすねん」

千賀が青春を送った時代には、紐はれっきとした花嫁修業だったのである。だから、現代の

娘たちが争って電気製品を花嫁道具に入れるように、伊賀の娘たちも又誇らしげに高台を嫁入りの荷に加えたのであった。

組紐を織る女たちには、自分の高台を持つという望みの他に、もう一つ共通する大きな願望という夢がある。それは紐屋の女主人^{あるじ}になることだ。織り子になろうと決意し、紐屋の格子戸を開けた瞬間から、その夢は彼女達の胸底で燃えだしている。結婚して、子をなしても、その子が成人し、妻から姑へと呼名が変わっても、その炎が消えることはない。けれども夢は、所詮夢でしかなく、大部分の女たちは、果たせぬ夢をかき抱いたままで生涯を終えるのだった。

その意味では、藤波組紐店の跡取り息子という金的を射止めた千賀は、運の強い果報者と言わねばならぬかもしれない。事実千賀が藤波へ嫁ぐと知った朋輩たちは羨望のまなざしを露骨に見せて言い合った。

「千賀さんは果報者やしてな。うちも美人に生んでもろたらよかった……」

「忍町の貧乏^{たれ}かて、紐屋になったら奥さんや、えらい出世だすなあ」

千賀は典型的な伊賀の女性の生き方を生きてきた娘である。小柄で色白で、その冴えざえとした美貌は、美人の少ない伊賀上野の町では際立ってみえた。伊賀傘の職人を父に、紐の織り手を母に持ち、忍町の露地裏の棟割長屋で生れ育った千賀は、小学校を卒業した年の五月、伊

賀一の組紐店増住の門をくぐった。増住は組紐店としても追隨を許さぬ格式と規模を誇る老舗だったが、それよりも伊賀上野では五指に入る素封家としてあがめられている。ほれ、あれもこれもみんな増住はんの山や、人々はおおいかぶさってくるほど間近な緑一色の山脈を指さして言い、自分達とは雲泥の資産を有するその家の生活をかい間見たいと、出入りの商人を呼びとめて聞きたすのだった。だから千賀も幼ない頃から増住はんという名前をよく知っていたし、憧憬といえる気持すら抱いていた。その憧憬は、年とともにはっきりと形を成し、勉強が好きでも女学校はおろか高等科への進学すら諦めねばならぬ我が家の内情を自覚した頃には、おさえようもないほどにふくれ上がった。千賀は紐を習うなら増住でと秘かに決め、両親の間で組紐の見習いへ出す話が交わされた時、それを口にした。忍町の裏長屋の娘が増住さんなどと、一笑にふしていた彼等も、我が子の余りに思いつめた言葉に驚き、いろいろ手を廻し、増住へ奉職できる道を捜しはじめたのだった。千賀は、父母にこう言ったのである。

「上の学校へ行けへんのなら行かんでもええ。その代り、うちは紐で、行った人ら見返してやるんや。一流の織り手になって、きつとその人らに頭下げさしてやるんや。そやさかい、増住に頼んどくなはれ」

しかし千賀の願望は初手から無茶な話だった。増住の織り手となると、おのずから限定さ

れてくる。格式ある素封家は、使用人といえどもその素性を考慮し、身元の不確かな者や、家族に札付きを持つ者は絶対雇用しなかった。特に増住は厳格をきわめ、奥内おくうちの奉公人にも、紐の織り手にも、邸内を一步出れば立派にお嬢さん、ぼんぼんで通る者しか使わないほどだ。その代り一旦奉職すると、それが一生本人とその家族の箔になる。現に、増住はんの女中というだけで良縁を得た娘もいた。それほどに神経を使う家だったから、忍町の長屋の娘など雇ったこともなく、雇うはずもなかった。一途に願う子供心を察して奔走した父母も、なすすべなくて、今度は我が子の説得を شدした。

「どだい無理や、諦めてえな」

「嫌や。なんで忍町の長屋があかんねん。うちには判らへん」

「なあ千賀、人間には分相応ちゅうことがあるねんで。高のぞみしたらあかんのや」

「高のぞみと違う。うちは紐を憶えたいだけや。お母ちゃんはいっつも、紐は織り手の腕で決まる言うてるやんか。そやさかい、うちはええ腕の織り手はんになりたいねん」

「ほんなら、何も増住はんのうちでも、伊賀には、立派な紐屋がぎょうさんあるで」

「あらへん。紐屋は増住だけや。うちは、増住以外では習わへん」

増住以外では紐を習わへんとまで決意した娘の本心が何なのか、両親は判断しかねた。深い

理由があるのだろうか。父親が問うた。

「わけなんかあらへん。ただ学校で習うたんや。どんな道に進んだかて、一流の人になるためには、何が一流で何が二流か見極める目を持たな、いかにて。うちは一流の織り手になったる。そやから、増住はんの紐がどんなにか知るために見習いになるんや。他に増住はんの紐を手にする所あらへんもん。よその紐屋の紐は、ぜんぶ二流やさかいな」

母は、増住以外の紐屋は格が落ちると、事ある度に教えた浅はかさを悔いた。しかし後の祭りである。もはや、どんな甘言も叱咤も、きらきらと輝くまなざしを向けて、自分達を正視している千賀の、燃える心をしずめるには役立たない。母親は、夜なべの高台で深いためいきを何度もした。

伊賀上野に縁が蘇る早春が来た。藤堂藩の藩校だった市立図書館の庭園に椿の花が咲きそろった日、千賀は母親に椿を見に行くと嘘をついて家を出た。その時の千賀は追いたてられているような気持だったのだ。学校を卒業するのも目前だったし、卒業すれば自分の下に三人も弟妹のいる身だから、当然働かなければならない。物心ついてからずっと紐を織る母親の手元を見続けてきた千賀に、紐以外の人生は考えられなかった。かと言って、他の紐屋では絶対嫌だった。なんとかしなければ、そんなせっぱつまった思いが千賀を向う見ずな行動にかり立てた